土木學會長は鐵道建設系

中村謙一男爵

中村土木學會長

本年土木學會長に選擧せられた中村謙一男爵は、明治38年の東京帝大土木科出で、直に國鐵に入り、昭和4年まで約25年間、建設工事に從事されたのであるから、純粋の鐵道建設技術家である。

鐵道省建設局長時代の昭和4年に貴族院議員に選擧されてから今年まで11年間の議員生活の爲に、土木技術家としての印象は薄くなつてゐるが、然し今日も建設線工事に對しては多大の關心を以つて新線の開通式には大概の場合列席して、地方の工事を視察される樣である。

○

中村男爵が建設局長時代は、我が國鐵建設工事の最も盛大を極めた時であつた、以來今日まで建設事業は次第に下り坂となつてゐるが、然し『工事は減少したが施工の方法は餘程進歩して來た』と云ふのが男爵最近の視察談である。

中村男爵は鐵道省勤務の傍ら、民間の工業教育にも關係されたので、其指導下から現在土木界に活躍してゐる有力な人物も輩出してゐる。

橋梁に關する中村男爵の著書は、當時非常な好評を博したもので、今日我國の橋梁構造設計の進歩發達の端緒をなしてゐるものである。

○

鐵道省建設局長を辭してから、議員生活の11年間は永い樣でも、青年技師時代の精進努力は忘れる事は出來ない、時代は一變して、今や重大なる國家政治の眞最中に立つた中村男爵である。新東亞建設の大業を完遂しなければならぬ我國民の覺悟の中に、土木と云ふものが何の位認められてゐるか、それは今議會に於ても種々の問題に觸れてゐる事と思はれるが、中村男爵は議事堂の一室で『此大陸開發の事業は技術なくしては何事も出來ない、故に技術はあらゆる方面に貢獻しなければならぬ、特に土木は其根幹をなすものであるから、近く成立すべき新政府と緊密なる提携の下に先づ鐵道、道路、河川、港灣、其他に關する事業を率先してやらねばならぬ。此等の土木施設が進行して初めて、大陸の豐富なる資源と勞力とを經濟的に有利に開發する事が出來るのである』と力强い言葉である。

○

曾て日露戰爭の旅順砲臺攻擊に於て、中村旅團長の率ゆる白襷隊が、死鬪を盡して松樹山砲臺を夜襲した、其忠勇義烈鬼神を泣かしむる旅團長中村少將(後の大將)こそ卽ち中村謙一氏の嚴父である。

支那事變の非常時局中に中村男爵を土木學會長に迎へる事は實に意義深いものがある。